

講評 第九回「胡堂・あらえびす大賞」音楽感想文の部

審査委員長 侘 美 淳

■第九回の胡堂・あらえびす大賞・音楽感想文の部に全体で三十八点の応募がありました。

県内・紫波町内はもとより、東京・神奈川・茨城など県外からの応募もありました。どの感想文も「学校の音楽授業や発表会に向けた活動」「日常生活の中の音楽への関わり」の中から選んだ、お気に入りの楽曲についての文章でした。音楽から受けた感動や気持ちが率直に書かれており、皆さんが実に多様な音楽活動を楽しんでいることがわかりました。

【ポピュラー部門】小5藤田あかりさん、一つの歌が、身近な自然災害のエピソードと絡めながら、人が前を向いて歩きだすための魂を揺さぶる歌だったことに気づいていく心の変化が素敵です。中1北條詩民子さん、一人の作曲家の死をきっかけに、彼の創作や生き様と現実の戦争と直面する中で、音楽を通して、平和に向けて自らの確信に近づいていく姿の変容が心を打ちます。社会人の阿部和幸さん、いつの時代にも存在する「欺瞞・偽善・軋轢」は、解決のできない人間の宿命なのでしょうか。一つの歌を通し、平和を希求する教養に溢れた思索が展開されています。

【クラシック部門】小4鈴木小夏さん、音楽を自然に受け入れるとともに、楽器や曲の感じ方にも注意しています。今後の音楽活動が楽しみです。中1北村花絵さん、中学校の授業をもとに、シューベルトにはまり、おっかけている姿が素敵です。人間の喜怒哀楽と音楽の分析的なとらえとの融合が面白いです。社会人の松原健太さん、人は、人生の節目節目にあたり、自問自答・選択・納得・修正・新たな展開等がつきものです。その時々において自分に寄り添い、支えてくれた一押し音楽との関係が吐露されています。

■人は、長い歴史の中で「文化・芸術」を育み、人間の生きている証として大切にしてきました。「野村あらえびす」がこよなく愛した音楽の表現や鑑賞もその対象です。これからも、いろいろな音楽との出会いをおし、人生が楽しく、豊かになることを願っています。